

## シベリア強制抑留記

愛知県 河村 広 康

私がまず居りましたところ、終戦を迎えましたところとは、これは満州でございませう。この満州の奉天、いわゆる今で言いますと瀋陽と申します。

今、見ると分かると思いますが、七百万人という大きな大都市になっております。昭和二十（一九四五）年ここで終戦を戦車隊で迎えました。そして、九月下旬、二十四、五日だったと記憶しておりますけれども、部隊長の西村大佐という方が全員を集めました。そして、ハルピンより北の鉄道工事を三カ月したら日本へ帰してやるとソ連から言ってきたから、まず間違いないと思うからおれについて来い。こういうことで私たちは瀋陽、いわゆる奉天で九月二十五日に貨物列車に乗せられました。その貨物列車というのは有蓋貨車でございまして、七分から八分ぐらい、米とかコーリ

ヤンとかトウモロコシとか、そういう穀類が積んでありました。その上に乗って、列車は進んだんです。ところが、ハルピンに着きましても列車は通過します。どこまで行っても止まりません。そして、着いたところが黒河といまして国境の町です。「黒河」と書きます。そして、その国境には黒竜江がとうとうと流れております。相手のソ連領にはブラゴエシチェンスクという、当時五万の都市がございました。そこで渡河をしなければならんわけですが、その黒河に着いたときには、本当に異様な一団と言ってはまことに叱られそうですが、九月三十日から十月一日の時でございまして、そのころはもう冬でございませう。私も昨年と一昨年もシベリアへ慰霊墓参に皆さんをお連れして行って来ましたが、もう八月三十一日ごろになりますと、白樺の葉が黄色くなって、はらはらと落ちちゃう。そういう時期でございませうから、もう九月の末、十月の初めというともう冬と言っても過言ではないぐらい寒いんです。その

ときに、その一団と申しますのは、夏服、それも汗とほりにまみれた夏服を着て、顔はやせかけて真つ黒け、身につけておるものは雑のうか水筒一個ぐらいでございますので、「いや、やつらは何だろうな」と言っておったんですよ。いよいよ、貨車に積んである米の入ったかます吠やら、そういうものを担いで、私たちが堤防をおりて船に積み込むのですけれども、そのときに吠から、ばらばらと破れ目から米がこぼれるんです。そうすると、その一団がわつとたかってくるんです。そして、堤防にこぼれた米粒を拾って口の中へほうり込む。まことに餓鬼の地獄でした。いや、やつらは難儀しておるなと言ってお互いに話をして、吠の破れ目を大きくして、米をどンドンこぼしながら私は進んだ覚えがあります。

そして渡りましてから、また今度は、これがシベリア鉄道というモスクワまで続いておりますけれども、このブラゴエシチェンスクから私はまた貨車に乗せられました。これが有名な

バイカル湖ですけれども、ここで降りて飯ごう炊さんをしたときに、初めて顔を洗うことができませんでした。当然、私たちも真つ黒な顔をしておった。そのときに一番記憶にありますのは、マイナスぐらいになりますと、手を洗って、その手が飯ごうにくっつきますと離れないんです。手に飯ごうが凍りついちゃう。そのぐらいの寒さがあつたということを記憶しております。そこを通り越しますと、ここがタイシエツトというところです。私はタイシエツトから四十一キロ入つたところの収容所に収容されました。いわゆるシベリア第二鉄道といまして、バム鉄道といえます。これは四千三百キロございます。この四千三百キロの中で、日本の私どもが敷設した鉄道は三百五十キロ。この鉄道で一番つらかつたというのは、伐採でございます。一番、そのことが象徴されるのは、まくら木一本に日本人が一人死んだという言葉が流行したほどひどい作業でございました。

そこで、私の仕事は四十一キロ地点のところ



ツクで積んできた、また、軽便鉄道で積んできた材木を工場の一角におろして積み上げる仕事ですが、これは簡単です。材木をおろして積み上げる。簡単なように思いますが、これが命がけなんです。夏はそう苦になりませんが、冬なんかは軍手をはめまして、その上に手套といって、ラシヤ製の四本指から親指だけ離れておる、それをはめて、そして鉄棒を握って仕事をするんですが、零下三〇度、四〇度、ときには吹雪になりますと五〇度から五〇度過ぎになりますと、鉄棒を持っている感覚が五分とたないうちに、もうなくなっちゃう。そうすると、皆さんもご承知のように、材木を積んでありますと、支え杭があります。両側にこの支え杭を外さなきゃ原木はおろせない。そのときに、私たち、その鉄棒でもって、肩に担いでよいしょとこじ開けなければならぬ。そして、こじ開けたところで両方の端の支えに杭を抜きます。さあ、それが問題なんです。その鉄棒を同時に抜かないと大変なことになるんです。一方

が少しでも遅れたりしますと、これはもう丸太がごろごろとおりてくるやつにはねられて大怪我をしたり、重傷を負う。そして、中には死ぬ方がございました。私が帰るまでに二人の方が原木車下の問題で亡くなったわけでございますけれども、それほど神経を使います。

冬ですから三〇度。収容所を出るときは、三交替でございますが、夜の十一時ごろ出るときは三〇度から三〇度ちよつと過ぎております。ところが、現場へ行つて作業を始めます、風が吹いてきます。一メートルの風が吹くと一度下がると言われます。ですから、三〇度が四〇度、五〇度は、夜の仕事はざらでございましたので、非常にそれが難儀でした。腹は減つておる。手の感覚、また、体の感覚もなくなつてしまふということ、非常に難儀をした覚えがございます。

気候の問題ですけれども、寒いというのは、どうしてご理解いただけるかということなんです。北海道は大体満州と同じ緯度ですから二〇度ぐら

いになりまずけれども、それより北なんです。この寒さと飢餓のために、昭和二十年から二十一年にかけての真冬に、シベリアで亡くなった方の大半がその年に亡くなっちゃって。気候になれていない、食料がないということの結果だと思えますけれども、寒さについて、どうぞ理解を願ったらいいか。ほんとうに話すときに困るんです。

もちろん、まつげも凍っちゃうんです。極端に言えば、鼻毛も凍っちゃうんですから、話しようがないんですが、私が復員、日本に帰ってまいりましてから、幼友達が私のところへ来て言うんです。「おい、河村君、長いこと、苦勞さんやったな。しかし、シベリアは寒いと聞いたるけど、ある人から俺聞いたけれども」——びろうなお話になりますから我慢して聞いてください。「小便すると、積もってくるんだと。そして、男性の一物へびゅつとくつつく。それをピチンと指ではじいてしまうという話を聞いたがほんとうか」と言って、私に聞くんですね。私は、「いやあ、そんなばかな

ことはないよ。体温が三十五度、六度あるから、それが外へ出たって、すぐにそんなふうに凍るものじゃない。地表にうつすらとなるぐらいだよ」というような話をしますけれども、ほんとうに五〇度以上になりますと、そういう話をしたほうがいいかなと思うぐらい寒いですね。寒いんじゃないんですよね。外へ出ると痛いんです。寒さを通り越して痛いんです。五分もしますと、鼻の頭が真っ白になっちゃうんです。日本人と言うのは、寒いと「ああ、寒い」と、こう、鼻をこすりますけれども、もしそんなことをしたら、皮はぺろっとめくれちゃうんです。私の知った人で、そこへばい菌が入って非常に難儀した人がございますけれども。

もう一つ、寒さの表現で言いますと、私たち、こうやって始終まばたきをします。冬にまばたきしますと、ぼつとつむることはできません。開けるときに難儀するんです。まつげとまつげが凍っちゃって、なかなか目が開けられないというぐ

らしいの寒さですね。そして、夜の、一番寒かったのは六〇度ということを知ったことがありますが、それでも、もう体を動かすたびに、体と離れているところがくっつくこととひやつとするという、非常に寒さというものは、皆様方にご理解いただくのは難しい。冷蔵庫の四〇度に入ってみな分らんわなという話がございましたけれども、ほんとうに難しゅうございます。

そして、食べ物に移りますけれども、最初、半年までは続きませんでした、米でございました。次に大豆でございました。大豆のご飯に大豆のおかず。どこが違うかという、大豆のご飯というのは、ただゆでただけ。大豆のおかずというのは、塩を入れて煮ただけ。そういうのがついたことがございますけれども、一番困った食料はコーリヤンというものです。コーリヤンというものをご覧になったと思いますが、あれは黒い固い皮があるんですね。固い皮をはいで脱穀して炊いてくれたらいいんですけども、そのまま炊いちゃうんで

す。それをくれるんです。だから、私は非常に歯が弱くて、日本へ帰りまして二、三年のうちに、私は二十七、八ぐらいにはもう総入れ歯です。それから固いものは食べられませんけれども、そういう人でも、また、歯の丈夫な人でも、コーリヤンのゆでたやつを食べると、びろろな話ですが、翌日はそのまま出ちゃうんです。何も身につかない。

一番難儀したのは、これもまたびろろな話になりますが、トイレです。便所です。便所は大きな飯の建物がありました。中に、私たちの背丈以上の大きな穴を掘るんです。それは広い穴です。そして、そこへ板をずっとかけ渡して、そこでしゃがんで用を足すんですが、前の人のお尻は私たちに丸見え、また私のお尻は後ろの人が見えるんですが、そのコーリヤンを食べておるときが一番ひどかったのは、いわゆる皆さんも痔の悪い人があるかもしれないが、脱肛という、ああいうふうになった人、それがウンウンうなっている。また

は、血をぼたぼた垂らかしているというように、痔を本当に悪くしたのが、これはコーリアンのせいだなど思っただんですが、それほど食料というのはひどかった。

冬の食料は、先ほどのお話のとおり、何かもう食べるものがないんです。与えられたものしか食べられない。だから、私たちの中隊長が言ったんです。どんなわずかなものでもよく噛んで食べよと。ところが、そういう者は一人もおらんです。パンでも何でも量を増やすんです。薪火した飯ごうの中へパンの切れっ端、またはご飯をほうり込んで、雪をほうり込んで、とにかく腹いっぱい食いたいという一心でやると、栄養失調に早くなりやすいということでしたが、食べ物には非常に難儀をいたしました。

それから、環境の問題ですけれども、環境といえますと、いわゆる着たきりスズメです。冬でも代わりの着替えがございませんで、しょっちゅう着たままです。そして、冬は寒いですから、もう

防寒の外套まで着こんで寝るんです。二週間も三週間も着たきりスズメだったら、絶対シラミがわくんです。晩、暇があるとシラミ退治ばかりでやっております。それともう一つの害は南京虫です。あの大きな南京虫。あれに悩まされました。

重労働で体がふらふらになって帰ってまいりまして、夕食を食べて着の身着のままでごろんと横になります。疲れておるから、すぐ寝ちゃうですけど、れども、そのうちに一時間か二時間ぐらいたつと、体じゅうもぞもぞします。で、目を覚まして、たいまつに火をつけて見ますと、壁に南京虫がぞろぞろと板の間へ入り込もうとするんです。ソレを私たちは指でポチポチ、ポチポチとつぶす。憎らしいと。おれたちの骨皮の体をね、まだ足りんのかと、血を吸うのかと言つてつぶすんですが、この壁が石灰を溶かしたもので真っ白に塗つてあるんです。それが今言つた南京虫をつぶしたことによつて、一週間で赤黒くなっちゃうんですよ。それぐらい南京虫は多いです。また、絶えること

がない。また一週間たちますと、石灰を溶かして白く塗る。その繰り返しで南京虫には非常に悩まされました。それで、逃げ込んだからこれで休もうとすると、今度までもぞもぞする。これが今度シラミなんです。そういうことで、非常に南京虫とシラミには悩まされました。

じゃあ、入浴はあったか、なかったかという話ですが、入浴はございました。二週間に一回です。そして、私たちも普通、入浴だと、ああ、湯船にゆったりと入れるなど。軍隊でも湯船に入ったから、浴槽に入れるなど思った。しかし、さにあらず、脱いだ衣服は金のかぎがありますから、それへ全部ひっかけよと言います。で、ひっかけて、それを当番に渡しますと、滅菌室といって、温度をかけた部屋がすぐ隣にあります、そこへつるすんです。滅菌するだ。で、私たちは浴室へ入る。浴室というのは板の間です。温度も何もかけてない。そこで手おけに一杯のお湯をもらいます。私、最初は、これはお替りはくれるんだろうと思

って、手と顔を洗ったらもうないんです。湯がなくなっちゃう。それで、もう一杯くれと言ったら、一杯しか渡せないということなんです。これ、慣れたもので、しまいには小さい手おけ一杯で体じゅうを洗うことができるようになりました。

洗って、今度、外へ出ます。そうすると、当番の兵隊がかみそりを持って待っています。これについてちよつと話がございますが、私たちがシベリアへ着いたとき、日本の軍医がソ連の軍医に呼びつけられました。そして、これからは日本人は入浴するたびに下の毛を剃れと言いつけたんです。日本軍医は、そんな必要はない、今の我々はそんな毛を剃る必要のない体だ。ということ、ソ連は毛ジラミを警戒したのですが、皆さんもご承知のとおり、毛ジラミというのは何か交渉ごとがなけりや、あれはうつらないそうですので、日本の軍医は反対したのですが、ソ連の将校は聞かなかった。で、剃られるようになったんですが、そうしたら、ソ連の兵隊が「日本人は毛なしのドラ

ワーだ」と言って笑ったんですが、「毛なしのドラワー」というのは毛のない真木撮棒だと、ご想像のとおり、そういうことを言って笑ったというんですが、そういうことがございました。

着るものはない、食べる物は少ない、そして寒い。それで仕事が重労働。私、いつも皆さんによく雑談の中で話をするんですけども、私たちは、二十四、五歳の連中が多いんです。もちろん召集兵の方もございます。三十五、六から四十歳以上の方、妻子を置いて召集されてソ連に連れてこられた人もお見えでございましたけれども、大半の者は現役兵ですから二十四、五歳が多いんです。腹いっぱい食わせてくれたら、そんなものは私は重労働でも何でもないと思っただんですが、悲しいかな、今申し上げたように、食料がないがため皆さんが栄養失調になり、疲労が重なってあの世へ行く。

よくお話がございます。朝、目を覚ましたら、隣の戦友が寝ておった。死んでおったというお話

はよくお聞きになったことがあるかと思いますが、  
そういう状態でございます。